

5. 資料紹介

大刀の勾革に装着する装飾板 – 宇治市坊主山1号墳の出土例から –

平成22年度に当館友の会の中嶋行雄氏から、坊主山1号墳出土の三輪玉付き大刀の復元品を寄贈したいとの申し出をいただいた。復元品を製作する過程で、三輪玉周辺から出土した鉄地金銅張の鋌の付いた装飾板が、勾革に装着されたものと推定できるにいたので紹介したい。

坊主山1号墳は宇治市広野町寺山に所在した古墳時代後期の前方後円墳で、後円部直径27m、前方部幅18m、全長45mを測る。埋葬施設は後円部中央に直葬された全長3.6mの木棺である。¹⁾

三輪玉は、木棺内南部西寄りから出土した全長1,185mm、刃長975mmを測る直刀の把部の東側約8～15cmの位置に、把縁から把に沿う方向に連なってやや弧状に10個、そこから約2cm下層で把に直角に3個連なって出土した。勾革の把への装着状況を出土状況の写真等から判断すると、把縁側から1個目と2個目の三輪玉の間で把縁に装着し、10個目と11個目の三輪玉の間で把頭に装着したものと推定される。したがって把縁側1個と把頭側3個の三輪玉は、大刀形埴輪にも表現されているように把との装着部分からさらに上下に延びた勾革に装着されていたものと考えられる。今回紹介する鉄地金銅張の鋌の付いた装飾板は、この把頭側の3個の三輪玉の付近から小破片の状態出土している。²⁾

装飾板片のうち遺存状態の良いものをみると、鋌頭の直径は約7mmで、鋌足は頭の方から順に、4～5mmの骨³⁾、1mm前後の布、4～5mmの革を貫いている。先端は遺存状態の良いものに恵まれないが、短く折り曲げられているか広げられているように見える。骨には沈線文と列点文とが施され、鋌は沈線文の上に打たれている。また角にあたる破片では、列点文の2辺に囲まれた内側に直

弧文の一部が残っている。

これらは、その文様構成の特徴などから、材質は異なるものの、羽曳野市峯ヶ塚古墳⁴⁾や斑鳩町藤ノ木古墳⁵⁾に類例の認められる装飾板の一部と考えられる。⁶⁾

峯ヶ塚古墳の例は、幅3.3cm、長辺8cm以上、厚さ約1.5mmを測る木製の装具で、周縁部から幅約0.9cmの範囲は薄い銀板が被せられている。表面の文様は、中央に直弧文を配し、周縁には直弧文の周囲と外縁に沿う2重の列点文が巡らされ、短辺には2重の列点文の間に沈線文が施される。周縁部の2重の列点文の間には、短辺に3個、長辺に3個以上の金銅製の鋌の痕跡が認められる。

藤ノ木古墳の例は、幅3.6cm、長辺6cm以上、厚さ約1.2cmを測る装具で、文様を彫刻した木板の表面に銀板を被せて打ち出させたものと推定されている。銀板は鋌で木板に固定され、裏面には厚い布が張られている。文様は、中央に列点文による斜格子文を配し、周縁には斜格子文の周囲と外縁に沿う2重の列点文が巡らされる。周縁部の2重の列点文の間には短辺に3個、長辺に3個以上の鋌が認められる。

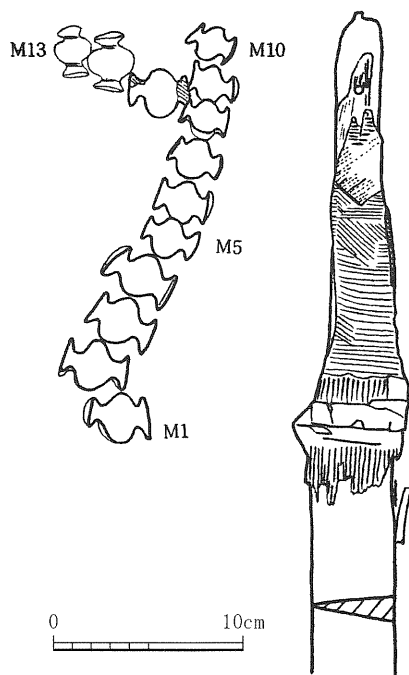
出土位置は、峯ヶ塚古墳が石室北西隅付近の大刀一括として取り上げられた大刀aの握り環頭と石室北壁との間、藤ノ木古墳が石棺南側に位置する大刀群の把頭と石棺東小口との間である。両者とも装着状況は不明であるが、大刀の把頭から僅かに離れた位置から出土していることは坊主山1号墳の例とも共通し、これら3例は同じ部位に装着されていたと考えることができる。その装着部位は、出土位置・三輪玉の大きさ・藤ノ木古墳出土の勾金の幅などからみて、把頭との装着部からさらに上方に延びる勾革(金)と推定される。⁷⁾ すなわち、この部分の勾革(金)の佩表

側には三輪玉が、佩裏側にはこれらの装飾板が装着されていたと推定されるのである。

出土状況の良好な峯ヶ塚古墳と藤ノ木古墳の双方で装着状況が判明しなかったことや、峯ヶ塚古墳の装飾板が裏面を上に向けて出土している⁸⁾ことも、勾革の三輪玉の裏面に装着され、言わば宙に浮いた状態で副葬されていたものが脱落したと考えれば理解しやすい。

末筆ながら、本稿作成に当たってさまざまなご教示をいただいた(株)京都科学西田省三氏、文化庁豊島直博氏、羽曳野市教育委員会吉澤則男氏に謝意を表したい。(森島康雄)

- 1) 堤圭三郎1965「坊主山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
- 2) 堤圭三郎1968「宇治市坊主山古墳出土の三輪玉について」『史想』第14号 京都教育大学考古学研究会
- 3) 前掲2)では鹿角とされているが想定される全体の大きさから、骨の可能性が考えられる。
- 4) 羽曳野市教育委員会生涯教育部文化財保護課2002『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』
- 5) 奈良県立橿原考古学研究所1993『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』
- 6) 剣装具で同様のものが飯田市溝口の塚古墳から出土している。飯田市教育委員会2001『溝口の塚古墳』
- 7) 峯ヶ塚古墳の報告では楔形把頭の側面に装着されていた可能性が示されているが、楔形把頭の側面に幅3.3cm×8cm以上もの平板な装具を装着できるとは考え難い。
- 8) 前掲4)では詳細な出土位置等は記されていないが、原色図版七に写っている。



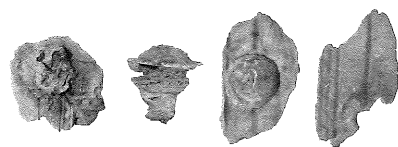
出土状況実測図



出土状況写真1



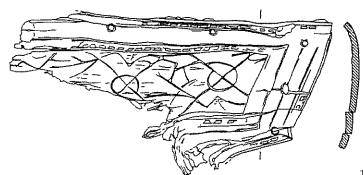
出土状況写真2



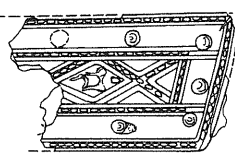
装飾板断片(ほぼ等倍)



出土状況写真3(三輪玉と鋌)



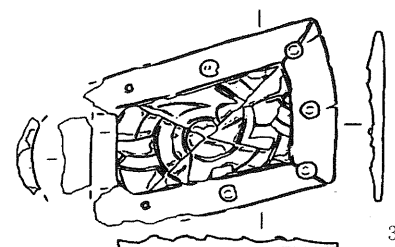
1



0 5cm



2



3

装飾板の類例 (1: 峯ヶ塚古墳、2: 藤ノ木古墳、3: 溝口の塚古墳)